

〈書評〉

篠田一士・鼓直・桑名一博編

『ラテンアメリカの文学』

(集英社, 全18巻, 1983—1984年)

昨年(1984年)末に終了した、全集『ラテンアメリカの文学』の刊行は、日本におけるラテンアメリカ文学受容の歴史上、画期的な事件であった。そこで、この全集を批評する前に、まずその歴史的な位置づけを行なってみたい。

日本でラテンアメリカ文学がどのような形で読まれてきたかということ振り返ってみると、そこには大きく分けて二つの傾向が存在することに気付く。ひとつは地方性、特殊性を強調するもので、いわば地域理解のための資料として文学を読むという傾向である。アジア・アフリカの文学と並べられたり、第三世界の文学のひとつとして扱われたりするときのラテンアメリカ文学も、問題にされているのはその地方性、地域的特色であるとみてかまわないだろう。この場合、読者が読み取ろうとしているのは、一般に、アジア・アフリカあるいは第三世界に共通する政治・社会状況、従属的歴史、そこから生まれる様々な矛盾であり、したがってこの種の読みのテキストとして最適なのは、現実を直接反映している(と見られる)リアリズム文学ということになる。

ラテンアメリカでは1950年代半頃まで、リアリズム文学が主流を占めていたこともあり、日本に比較的早く紹介されたのは、リアリズム文学の範疇に属するインディヘニスム小説(ホルヘ・イカサ『ワシプンゴ』)、メキシコ革命小説(マリアノ・アスエラ『虐げられし人々』)、政治小説(ミゲル・アンヘル・アストゥリアス『グアテマラの週末』、『緑の法皇』)、ジョルジュ・アマード『革命児プレステス』、『飢えの道』)などであった。読者にとり、それらの作品に含まれる証言、メッセージが文学性以上に重要であったことは言うまでもない。たとえば、アストゥリアスのノーベル賞受賞を契機として紹介されたのは「バナナ三部作」のひとつ『緑の法皇』であり、シュルレアリスムの技法を用

いた『大統領閣下』でも中米インディオの神話に基づく『グアテマラ伝説集』でもなかった。あるいは詩の分野で言えば、パブロ・ネルーダのいわゆる抵抗詩「木こりよめざめよ」やニコラス・ギリェンのムラート詩（黒人詩から派生した社会詩）が真っ先に紹介されているといった事実から、日本における従来のラテンアメリカ文学のイメージがいかなるものであったかが想像できるだろう（したがって、普遍の人類愛という抽象的テーマを持つガブリエラ・ミストラルの詩が、ノーベル賞受賞というニュース性を失ったとき、たちまち忘れさられてしまったのも、ひとつには政治的要素や第三世界的色彩が希薄だったためと思われる）。そのようなイメージが作られてきた背景には、社会主義リアリズムや実存主義の受容の問題、キューバ革命に端的に示された民族解放運動に対する関心などの国内的要因も大きく作用している。

もうひとつの傾向は、地域そのものに対する関心の有無はともかく、何よりもまず世界文学という文脈の中で作品を読もうとするもので、極端な場合、作者の国籍や名前はさして重要でなくなる。したがって土俗的なものよりコスモポリタンな性格を持った作品が好まれることになる。かつて、フランスの世紀末詩人たちとともにホセ・マリア・エレディアやルベン・ダリオが堀口大學によって紹介されたり、ホルヘ・ルイス・ボルヘスが英・仏文学者たちにまず読まれ始めたことは、この第二の傾向を示す例と言えよう。たとえばボルヘスの場合、とりわけフランスのロジェ・カイヨワの評価が日本に紹介されるきっかけとなっているが、彼の文学はラテンアメリカのそれというよりもむしろ欧米文学の変種とみなされてきた。

欧米文学の変種という見方は、レベルは異なるがスペイン文学者の間にも最近まで広く存在した。つまりラテンアメリカ文学を植民地文学と見るもので、1960年代に出た文学史や詩のアンソロジーがまだ「南欧の文学」、「南欧編」といったタイトルの下にラテンアメリカの文学を扱っているのも、こうした視点と無関係ではない。興味深いのは、この視点が、おそらくはイベリアを情報源とするところから主に生まれていることである。つまり日本では、スペイン語文学はもっぱら大学等におけるスペイン語教育の教材として読まれてきたと

いう背景があるが、そこからアカデミア文法、標準語にのっとった作品すなわちスペイン文学がより好まれてきた。しかもラテンアメリカの古いタイプの小説は、地方色を強調するあまりことさら方言や特殊な語彙を用いる傾向があり、教材としては不適當であるという判断が働いたと思われる。このことは、スペイン語文学研究者によるラテンアメリカ新小説の動向の紹介が当初ほとんど見られなかったことのひとつの原因であろう。それから挙げておかなければならないのが、スペイン語文学の出版状況に関する情報の不足で、新刊情報の入手の困難が今日もなお、研究者にとり最新の動向を知る上で大きな障害となっていることは否めない。したがって、欧米の出版状況に通じている出版関係者や欧米文学者らの方が、地域の情報に頼る研究者よりもむしろ早く動向を察知していることも珍しくない。

さらに、地域内における評価と国際的評価の差異も見逃せない。というのも、地域内で行なわれるアンケートなどに端的に示されるのだが、ナショナリズムが絡むこともあって、土着的テーマを持った地方色の濃い作品に比較し、普遍的テーマを持つ国際的作品の評価はかならずしも高くない。そのため、地域に密着することによりかえって作品の客観的評価が困難になるという場合もまま見られるからである。今日、もはや古典にさえなっている〈新しい小説〉が、欧米で評価された後、地域に逆輸入されたケースもまれではない。ホセ・ドノソ『ブームの履歴書』は、そのようなラテンアメリカ文学の転換期の状況を巧みに伝えている。

しかしラテンアメリカでは、50年代末から60年代にかけて次々と発表され、〈ブーム〉と呼ばれる現象を引き起していた。雑誌『文芸』の特集(1971年)や『現代ラテン・アメリカ短篇選集』(白水社、1972年)、『百年の孤独』(新潮社、1972年)の翻訳紹介は、〈ブーム〉がようやく日本に近づいたことを予告するものだった。その一方で、むしろそれらに遅れる形で『ワシプンゴ』(朝日新聞社、1974年)が紹介されているあたりに、当時の日本におけるラテンアメリカ文学のイメージが転換期にあったことが窺える。

その後も、アレホ・カルペンティエールの『この世の王国』(創土社、1974

年) やフランス文学に引きつけた形ではあるが、セベロ・サルドゥイの『コブラ』(晶文社, 1975年), ギマランイス・ローザの「大いなる奥地」, ドノソの「この日曜日」(『世界文学大系』, 筑摩書房, 1976年), あるいはオクタビオ・パス, カルロス・フエンテスの評論などが翻訳されている。だが, 日本のラテンアメリカ文学受容の歴史において, 文字通り画期的だったのが1977年である。この年, <ブーム>の作家たちの短・中篇を中心とした『ラテンアメリカ文学叢書』全15巻(国書刊行会)の刊行が開始される一方, ドノソの『夜のみだらな鳥』, カルペンティエール/ガルシア=マルケス『失われた足跡/大佐に手紙は来ない, 他』を皮切りに, 全集『新しい世界の文学』(集英社)に収録された, 主に長篇からなる重要な作品五巻の刊行が始まっているのだ。ここに至って, ラテンアメリカ文学はにわかに注目を浴びることになり, <新しい小説>の存在がいわば認知されたのである。要するにそれまで紹介が進みながらも例外的作家と見られていたボルヘスが決して孤立した存在ではないこと, 前衛性, 実験性がむしろ<新しい小説>の特徴であることなどが明らかになった。また前者の叢書は, 『グアテマラ伝説集』によってアストゥリアスの前衛的側面に光を当て, 『遊戯の終り』に見られる短篇作家コルターサル, あるいはマヌエル・プイグの『リタ・ヘイワースの背信』が示すもはや<ポスト・ブーム>と呼ぶに相応しい新たな傾向を知らしめ, ラテンアメリカ文学のイメージの幅を広げるのに貢献した。しかもそれらの刊行がほぼ終了する1979年に, バルガス=リョサとボルヘスの相次ぐ来日があり, 日本とラテンアメリカの心的距離が縮まるとともに, それまで抽象的存在であったラテンアメリカ文学をきわめて具体的なものとして意識させることになった。偶然ではあるが, ともに<新しい小説>を書きながら, 地域にこだわりリアリズムの徹底追求と政治への関心を特徴とするバルガス=リョサとコスモポリタンで反リアリズムの方法を用い, 政治的関心を示さないボルヘスという, 対照的な二人の来日は, 第一世代と第三世代という世代の幅とともに, ラテンアメリカ作家の層と多様性を暗示することにもなった。この時期と相前後して, 『海』, 『ユリイカ』, 『カイエ』などの文芸誌で特集が組まれたり, 書評が盛んに書かれたことにより読

者の関心を集めていたが、特に1982年度のノーベル文学賞がガルシア＝マルケスに与えられると、ラテンアメリカ文学はあらためて注目され、既に紹介されていた作品が再評価されるという現象も見られた。ノーベル賞受賞直後にガルシア＝マルケスの新作を掲載した『新潮』が売り切れたことを見ても、当時の反響を窺い知ることができよう。さらに言うなら、キューバ革命の衝撃や60年代後半に顕著になる、周縁文化、マイノリティ、フォルクローレなどに対する関心の高まりが、ラテンアメリカ地域への関心を生んでいたことも、重要な背景となるだろう。

さて、このように、比較的好条件に恵まれた中で、全集『ラテンアメリカの文学』の刊行が開始されるわけである。が、現在ならばこの全集の実現は難しいと言われる。というのも、今日一般的に海外文学が読まれない現象があるのに加えて、ラテンアメリカ文学を積極的に紹介してきた文芸誌『カイエ』や『海』が廃刊になるなど、出版界全体の不況が存在し、リスクをともう企画が通る可能性はきわめて小さいからである。事実、企画の段階では、現在見るよりもはるかに大規模な全集が検討されていたという。

ここで全集全18巻の構成を見てみよう。収録されている著者、出身国、作品、訳者は次の通りである。

- ① ボルヘス (アルゼンチン) 『伝奇集』 (篠田一士)。
- ② アストゥリアス (グアテマラ) 『大統領閣下』 (内田吉彦)。
- ③ カルペンティエール (キューバ) 『失われた足跡』 (牛島信明)。
- ④ ミゲル・オテロ＝シルバ (ベネズエラ) 『自由の王——ローペ・デ・アギーレ』 (牛島)。
- ⑤ ファン・カルロス・オネッティ (ウルグアイ) 『はかない人生』 (鼓直)。
- ⑥ マヌエル・ムヒカ＝ライネス (アルゼンチン) 『ボマルツォ公の回想』 (土岐恒二, 安藤哲行)。
- ⑦ エルネスト・サバト (アルゼンチン) 『英雄たちと墓』 (安藤)。
- ⑧ フリオ・コルターサル (アルゼンチン) 『石蹴り遊び』 (土岐)。
- ⑨ アドルフォ・ビオイ＝カサーレス (アルゼンチン) 『日向で眠れ／豚の戦記』 (高見英一, 荻内勝之)。
- ⑩ アウグスト・ロア＝バストス (パラグアイ) 『汝、人の子よ』 (吉田

秀太郎). ⑪ ドノソ (チリ)『夜のみだらな鳥』(鼓). ⑫ クラリッセ・リスベクトール (ブラジル)『G.Hの受難／家族の絆』(高橋都彦他). ⑬ ガルシア＝マルケス (コロンビア)『族長の秋』(鼓). ⑭ フェンテス (メキシコ)『脱皮』(内田). ⑮ ギリェルモ・カブレラ＝インファンテ (キューバ)『亡き王子のためのハバーナ』(木村栄一). ⑯ プイグ (アルゼンチン)『蜘蛛女のキス』(野谷文昭). ⑰ バルガス＝ジョサ (ペルー)『ラ・カテドラルでの対話』(桑名一博, 野谷). ⑱ アルフレード・ブライス＝エチェニケ『幾度もペドロ』(野谷).

以上のうち, ②は「グアテマラ伝説集」(牛島), ③は「時との戦い」(鼓), ⑤は「井戸」(杉山晃)を併録している。

リストから分かるように, この全集は, 本邦初訳を中心としながらも, ①, ②, ③, ⑤, ⑧, ⑪, ⑰のように既訳の存在するものを含んでいる。その意味では, 前述の『世界の文学』中のラテンアメリカの作品を核とした全集と見ることもできる。しかし, すでに知られている作品も, あらためて全集に加えられてみると, 『世界の文学』の中にあっただきとは異なる相貌を示す。つまり新たな場, 他の作品との関係性の中に置かれることで, 個としてまたグループとして, 新たな性格を示し始めるのだ。さらに言えば, 前に触れた他の全集や個別に紹介された作品も, この全集との関係において, 別の特徴を現わすだろうし, また作品群におけるその位置にも変化が生じるにちがいない。でも, 具体的にはどうなのか。以下, 全集から読み取れる特徴をいくつか挙げてみることにする。

まず, 作家の国籍に注目すると, アルゼンチンに集中していることが分かる。これにウルグアイのオネッティを加えれば, ラプラタ地域出身の作家が18人中7人を占めることになる。また小国であるキューバから二人の作家が選ばれていることも注目に値する。しかも, 企画の段階では, 当初キューバのホセ・レサマ＝リマの作品が収録されることになっていた。この偏りはけっして恣意的なものではなく, 文学的レベルを問題にするところから生じている。いいかえれば, ラプラタ地域とキューバの文学的先進性が生んだものである。

たとえばブエノスアイレスでは、世紀末にルベン・ダリオを迎えてモデルニスモのグループが結成され、1920年代には、ヨーロッパ帰りのボルヘスによって前衛運動であるウルトラリスモがもたらされるなど、早くから文学活動が活発で、前衛派が現われている。また都市化が一早く進むとともに大衆化が興隆し、文学に影響を与えている。その結果、ラプラタ地域は、ラテンアメリカの中でもっとも早く幻想文学など〈新しい小説〉を生むことになった。キューバの場合は前衛詩を特徴とし、1920年代に現われた黒人詩の運動に典型的に見られるような言語実験が盛んに行なわれた。この言葉への執着は、散文においても顕著で、やはり〈新しい小説〉を生む大きな要因となっている。一方、ペルーからも二人の作家が選ばれている。年齢は近いが、バルガス＝ジョサが〈ブーム〉の作家であるのに対し、ブライス＝エチェニケは〈ポスト・ブーム〉の作家と見なされていること、また前者が全体小説を企図しているのに対し、後者はヌーヴォー・ロマンを意識した、小説の解体、小説の小説を試みる批評意識を持った存在であることなどが、選ばれた理由であると思われる。企画の段階では、ブライス＝エチェニケの代表作とされる『ジュリアスの世界』が候補となった後、分量の関係で『幾度もペドロ』に代わったという。しかし前者がどちらかと言えば伝統的教養小説の枠内にあるのに対し、後者はとりわけ形式においてははるかにラジカルな実験小説となっている。そのほか目立つことと言えば、日本ではこれまで「ラテンアメリカ文学」と言いながら実際には「イスパノアメリカ文学」を指すことが多かったが、今回の全集は、わずか一巻ではあるがブラジルの作品を含めることで、曲がりなりにも文字通りの「ラテンアメリカの文学」となっている。ブラジルからもうひとり選ぶとすれば、おそらくジョアン・ギマラインス＝ローザあたりになるのだろうが、彼の代表作『大いなる奥地』が翻訳紹介されていることはすでに述べた。メキシコからはフェンテスしか選ばれていないことを考えれば、ブラジルからひとりだけというのも致し方のないところだろう。

次に作家の世代を見てみよう。この全集には、大別すると、〈ブーム〉の世代を中心に三つの世代が混在している。〈ブーム〉の世代とは、コルターサ

ル、フエンテス、ガルシア＝マルケス、バルガス＝ジョサの4人にドノソ、カブレラ＝インファンテを加えたグループであり、それ以前の世代に属するのがボルヘス、アストゥリアス、カルペンティエール、オテロ＝シルバ、ムヒカ＝ライネス、ビオイ＝カサーレス、ロア＝バストス、そして以後の世代がブイグ、ブライス＝エチュニケということになる。リスペクトールは、あえて分類すれば、第二世代とみなすことができる。もっとも、生年、あるいは処女作、代表作を発表した年など、何を基準にするかで、分類が変化せざるをえないことは言うまでもない。世代を見て気付くのは、第三世代すなわち〈ポスト・ブーム〉の世代がわずかに二人であり、さらに1940年以降に生まれた作家となると皆無であることだ。全体として若い世代が小型化していることは否めないが、しかしこの世代に属する作家ですでにノーベル賞候補となっているメキシコのフェルナンド・デル・パソや魔術的リアリズムで知られるキューバのレイナルド・アレナスらが存在することを忘れてはならないだろう。それはともかく、最年長のボルヘス（1899―）と最年少のブライス＝エチュニケ（1939―）の間には40歳の開きがありながら、〈新しい小説〉の書き手ということでは共通しており、前述の三世代の競合によってラテンアメリカ文学が活性化したことは明らかである。

作家の性別について言えば、全集中女流はリスペクトールただひとりである。少ないことは確かだが、しかしラテンアメリカの作家を見渡すと、女流詩人は比較的豊富であるのに対し、女流の小説家は必ずしも多くないし、国際的レベルに達している作家となるとごく少数に限られてしまうことも事実である。仮にもう一名加えるとすれば、これもまたアルゼンチンから選ぶことになるだろう。

最後に作品についてだが、オリジナルの刊行年を見ると、作者の生年同様なかなりの幅がある。中心になっているのは、〈ブーム〉の時期が代表作、『英雄たちと墓』（62）、『ボマルツォ公の回想』（62）、『石蹴り遊び』（63）、『脱皮』（67）、『ラ・カテドラルでの対話』（69）、『夜のみだらな鳥』（70）であるが、しかしもっとも古い『グアテマラ伝説集』（30）や〈新しい小説〉の先駆的作品『井



戸』(39) からもっとも新しいものでは『亡き王子のためのハバーナ』(79), 『自由の王』(79) までが含まれ, <ブーム>以前に文学革命が始まっていたことや<ブーム>以後の傾向を知ることとも可能となっている。ことに1970年代もまた, 小説の分野は活況を呈していたことを, 『族長の秋』(75) をはじめとする五つの作品が示している。それらを見れば, 1960年代に勝るとも劣らぬ実験の時代だったことが分かるだろう。

さらに作品相互の関係に注目すると, 全体として, 旧来のリアリズム小説から離反している点では共通する一方, 世代間の葛藤, 旧世代の文学主義と<ブーム>以後の世代に見られる反文学主義の対立や, ジョイス流の実験的手法を用いたガルシア＝マルケスのポリフォニックな独裁者小説による, アストゥリアスのシュルレアリスムの技法を用いた政治小説としての独裁者小説に対する挑戦が, 全集の中で生じていることに気付くはずである。

詩, 評論, 戯曲を収めた巻が欲しい, といった注文がないではないが, いずれにせよこの全集が, 欧米の周縁に位置する地域の文学の在り方, 可能性を示したことは確かである。

野谷文昭 (津田塾大学)